

マッセ・市民セミナー（中部ブロック）

**「子どものこころの発達と障害**

**～地域でともに生きるために～」**

開催日：平成24年7月24日（火）

会 場：阿倍野区民センター 小ホール





## 「子どものこころの発達と障害

### ～地域でともに生きるために～」

佐々木 正美 氏（川崎医療福祉大学 特任教授）



#### はじめに

今日は、皆さんに発達障がいの子どものことについてお話をしようご依頼をいただきました。発達障がいの子もや人は、ある部分で発達が遅れているということは事実です。発達の様相が違うわけです。ですから、発達障がいの子もたち、大人になった人たちの中には、ある特定の領域に関しては、一般の子もや一般の人よりはるかに優れている人もいます。ところが、普通一般の子もや一般の人たちなら誰でも分かるようなことが分からないということがあって、発達が一人の人の中で非常に不均衡な状態にあるのが発達障がいです。発達の遅れというご理解は決してなさらないようにしてください。違っているだけなのです。何がどのように、どれだけ違うのかをできるだけご理解いただきたいと思います。

私がすべてを理解しているわけではありませんが、それでも45年ほどこういう仕事をずっと続けてきて、30年前にノースカロライナ州のTEACCHモデルに出会って、その都度その都度新たな理解を繰り返しながら今日までやってきました。今日の時点で発達障がいをどのように考えているかを皆さんにお伝えしたいと思っています。

皆さんにお配りしているレジュメに「発達障がいのまま、健康に幸福に生きる」と書いてあります。というのは、発達障がいの子もを発達障がいでない子もにすることはできないということです。病気と違って治せません。治そうとされた人ほど、非常に不幸なことに、二次障がいを強くしてしまいます。今日は保育士さんや幼児教育の先生方が多いと伺いましたが、当初子ども様子についてご両親が理解できないことがあるかと思います。あるいは、私たちや皆さんが、「このようにみんなと違いますよ」と伝えようとしても、それをご両親はなかなか受け入れることができないことがあります。それは、わが子の障がいを受け入れないということですが、実際はわが子を受け入れないこと

になってしまって、その子の持っている特性、障がいやを治そうとしてしまいます。治らないものを治そうとするのは、治される側からするとひどく苦痛なものです。そして、本来持って生まれてきた特性ではない二次的な障がいをその上にのせてしまって、大変不幸な子どもや青年や人々をつくってしまうことが非常に多いのです。

これからお話しする特性を持っているのが発達障がいです。これがしっかり認識、理解されればより適切な日々の養育ができますが、そうではない子だと理解したい、思いたいとなさると、無理やりそうでないようにしようとするわけです。それは不可能なことです。そして、もともとなかった二次障がいやがプラスアルファされてくるのが決して少なくありません。思春期、青年期にも大変不幸な状態で苦しんでいる人が、わが国にはどれだけ多いかわざらざるを得ません。

近年、緊急なご相談ということで私たちのやっている「ぶどうの木」のホームページに直接アクセスしてこられるのは青年や成人になった人が多いのです。そして、その大半の人は発達障がいです。そして、わが子を大きくなるまで発達障がいだと理解しようとされなくて、何とかみんなと同じような人になろうとすることをご両親が多いのです。私は普通学級に入れることが悪いと言うものではありません。しかし、普通学級に入れて普通の子どもと同じようにしようとするのは不可能なことです。そして、そのようなことを繰り返してやっていると、あるときから、その少年、あるいは青年、あるいは大人になった人が激しい二次反応を起こします。周囲に激しい暴力を振るうのです。また、暴力を振るいながら、周りの人が呆然とせざるを得ないような状態になって引きこもってしまう人もいます。さらに、私は一部のひとと申し上げたいですが、周囲の人には分からない、動機もはっきりしない、殺傷事件を起こしてしまう人もいます。それも、恨みのある人ではなくて、「どうしてだろう」と思うような通りすがりの人に危害を加えるということが起きてしまう。

そして、そこで初めて精神鑑定を受けて、発達障がいということが分かるわけです。それまで発達障がいとして適切な対応をなされてこなかった人が近年、本当に次から次へ発見されています。ですから、子どもたちが小さいときから、「この子は発達障がいなのです。だから、このように理解して、このように育てていけばいいのです」という元のところを今日はご案内したいと思っています。

皆さんは、発達障がいのまま、健康に幸福に生きていくことができるように、保育、教育、療育、指導、支援をしてくださいればいいわけです。そのためには、発達障がいのままであってあげればいいというものではありません。発達障がいの特性をしっかりと理解していただきたいと思います。しっかりと理解された上で、その子に寄り添って保育や教育をしてほしいのです。

最初に発達障がい、自閉症という言葉が発見されたのは1943年（昭和18年）ですが、それから長い月日がたちました。その間、専門家は試行錯誤を繰り返しながら、数十年一生懸命研究してきました。同時に、発達障がいの人ご自身が大きくなって、大人になってから分かるケースが次々出てきました。そういう中で、とても能力の高い、自由に話ができる人がだんだん出てこられました。皆さん、ご存じかどうか。発達障がいの方は自由に話ができても、この人なら話しても大丈夫だという気持ちになれないとなかなか本心を打ち明けないで黙っているのです。しかし、だんだん自分のことをきちんと打ち明ける人たちが出てきました。そして、今まで専門家がいろいろ研究して、発達障がいの人を定義してきたことに対して、当事者が自分はこうなのです、あなのですと訴えるようになりました。それを照合することによって、初めて今までの研究が適切な正しい研究であったかどうかも分かってきたのです。そして、専門家の専門的な研究の成果を当事者たちが裏付けできるようになってきました。その具体的なことを今日はお話してみたいと思っています。

## 1. 発達障がい（自閉症）スペクトラムの3特徴／国際的な診断基準

発達障がい（自閉症）、あるいは最近、自閉症スペクトラムという言い方をされます。自閉症の子ども、自閉的な子ども、自閉傾向のある子ども、何も変わらないのですが、かつてはいろいろな言い方がされました。そんな言い方はやめましょうと言って、英国のローナ・ウイングという人が自閉症スペクトラム（連続体）という表現を提唱しています。今では自閉症スペクトラム、自閉症連続体という表現が一般的かもしれません。そして、そういう意味では自閉症の人と深いつながりというか、連携というか、近接領域の特性を持った人に注意欠陥・多動性障害（ADHD）、あるいは学習障害（LD）といった子どもや人たちがいます。そういう人たちも全部含めて発達障がいスペクトラム（連続体）

と考えてもいいと思っています。

WHOが自閉症スペクトラムという特性の子ども、人々に対して設定した国際診断基準の1番にそのことを書いています。「人とのかかわりや社会性に特別な特性を持っている」。一言で言えば障がいを持っていると言ってもいいわけですが、人とのかかわり、社会性に障がいがある、人とのかかわり、社会性に特徴があるわけです。同じように、コミュニケーションに特徴がある、障がいがあります。どちらを使われてもいいかもしれません。コミュニケーションとは、単純に言葉のやり取りではないのです。コミュニケーションの定義として「人と喜びを分かち合う、喜びを共有し合う」というものが私は好きです。必要なときには、他者と悲しみを分かち合う、悲しみを共有し合う、こういうものがコミュニケーションの根底だということならば、自閉症、発達障がいの子どもたちは徹底的にその部分が欠落します。そういう意味でのコミュニケーションの特徴、障がいがあります。

それから何よりも、彼らの日々の生活を私たちが支えて、寄り添っていくときに重要なのは、彼らのイマジネーションの特徴を理解することです。具体的に言いますと、見えないものに意味を持たせる、見えないものに意味を感じるこの障がいと言ってもいいかと思います。自閉症の人は、大きくなってもなかなか未来を語れません。未来は見えないのです。過去のことには非常に鮮明に記憶している人がたくさんいます。過去はよく知っていて、過去のことを鮮明に語ってくれたり、よく覚えている人はたくさんいますが、これからをどうしていこうという3年先、5年先、10年先という話に乗ってくる人はいません。未来は見えない世界、想像の世界なのです。そういう意味で、イマジネーションの障がい、特性があります。この三つの特性がしっかりしていれば自閉症スペクトラムです。今日では発達障がいという言い方をするかもしれません。

## 2. 学習スタイル／情報処理、思考、学習

この人たちの一番基本的な特徴は、何かを学習、理解、認識、認知していくとき、すなわち、頭で何かを情報処理して、考えて、思考していくときに、特有のスタイルを持っていることです。学習スタイル、ラーニングスタイルも、一般の子ども、一般の人とは決定的に違います。この違いをしっかりとご存じにならないと保育も教育も十分できません。

## 2-1. 視覚的に考える

まず、何を置いても視覚的に考える。これがとても強いのです。この人たちの大きな特徴です。絵にして考えるのが得意なのです。後でご本人の言葉を読み合わせてみようと思います。話し言葉を頭の中で絵にするのです。絵にすることのできないものは意味にならないのです。

ですから、非常に難しいのは、絵にすることができない、比喩的、抽象的な言葉です。例えば幸福、親切というような言葉を聞いたときです。「幸せですか」と聞かれても、大人になった自閉症の人は「何をもって幸せと言うのか分からない」とよく言います。私たちは「お幸せでそうでいらっしやいますね」と友人や知人などに言われると、いろいろな思いで自分は幸せだと思い、「おかげさまで」という言葉を交換し合います。自閉症の人がこんな言葉を交換することは大人になってもまずありません。

「お元気そうですね」「お幸せそうですね」「おかげさまで、ありがとうございます」。私たちはそういう対応ができます。「あなたも、お幸せそうではないですか」「お元気そうではないですか」「ええ、おかげさまで」。こういう会話が私たちにはたくさんあります。「お幸せそう」「お元気そうです」という言葉の意味を自分なりに意味を読み取ります。自閉症の人はそれができないのです。だから何を言われたのか分かりません。大人になってもそうです。こういうところがとても違います。ただ、後ほどご案内しますが、非常に能力の高い人はこういう文体を無理やり自分の頭の中に絵にして考える人がいます。

一方、目で見えるものはよく分かります。文字はよく分かります。文字、文章で考えるのです。中には「絵と文字を組み合わせるのが得意です」とおっしゃる人もいます。絵と文字を組み合わせるの方がいろいろ複雑でハイレベルなことを考えることができます。絵だけで考える人は複雑なものを考えるににくいわけです。人によっては、言葉だけでも分かるようになって、映像や図などにした方がよく分かる人がいます。ですから、頭の中で言葉を映像や図に一生懸命するわけです。皆さんもご存じだと思うのですが、発達障がいの子どもたちには絵カードで示してあげて、短い言葉を付け足してあげたら一番よく分かるのです。

ノースカロライナ州の方へ行きますと、皆さんのような先生たちはエブロン

のようなものをしていっしょって、エプロンの前に三つぐらいポケットを付けています。その中には絵カードが分類されて入っていて、必要なカードをぱっと見せながら短い言葉で説明していきます。非常に分かりやすいですから、子どもはそれに反応しててきばき動きます。言葉だけで保育をなさるよりはるかによく分かります。絵カードで分かりにくいときには、実物を見せるというやり方もします。

そして、発達障がいの方は細部に関心・注意が強く向かうのです。木を見て森を見ないというように、狭い所に深く強く向かいます。そして、具体的なことがよく分かります。われわれから見ると何事も詳細を極めるような世界です。ですから、科学者などに発達障がいの方が時々います。ノーベル賞受賞者と呼ばれる人の中にも時にはいます。私は、毎年世界のノーベル化学賞や物理学賞が発表されてテレビに出てインタビューを受けている場面を、この中に発達障がい、自閉症の人がいないかなという気持ちで聞いていることがあります。 「多分、この人は間違いなく自閉症でしょうね」という人が何年かに1人います。狭い所に非常に深く強い関心に向けておられるのです。こういう人は、一般的には広い概念を持ちにくく、何かを推測、類推、応用するのが下手な人が多いのです。

以上を、簡単に一言で申し上げれば、絵で見て理解する。具体的なことが分からない、比喩、抽象的なことが分かりにくいということです。

意味や抽象が分かりにくいということに関して、例を一つご案内します。

横浜にある少年がいて、学校へ行っているわけですが、漢字の書き取りは視覚的なことですから、先生よりはるかに多く、正確に、先生も舌を巻くほど知っているわけです。そして、算数の計算になると、暗算で、普通の少年にはできないほどとても速く正確に計算できるのです。ご家族は、近く漢字検定何とかテストに出してみようかな、などおっしゃっていましたが、そういう意味では希望が持てました。

その子のお父さんがあるとき心配されて、「あなたも、そろそろ空気が読めるようにしないと駄目だよ」とおっしゃったのです。この子たちはそこが難しいわけです。そのお父さんの言葉を聞いたときに、その少年は、「お父さん、空気なんか読んでは駄目です。空気は吸いなさい」と言ったのです。その少年は「お父さんの頭がおかしくなった」と思ったようでお母さんにそう言ったそうです。お母さんは、「お父さんにそう言われた夜、もしかしたら、この子は



寝ないでお父さんの頭を心配していたのかもしれない」とおっしゃっていました。その少年は翌日早く起きてきて、お父さんが出勤されるときに、お母さんと一緒に門の所まで送りだすように付いてきて、出勤していくお父さんに、「空気は読まないで吸ってください。読むのは字ですよ」と言ったのです。会社に行って、こんなばかなことを言って周りの人から変に思われたら、お父さんがかわいそうだとでも思ったのでしょうか。これは、発達障がいの人とそうでない人と典型的な違いです。

また、「首を長くして待つ」という言葉も通じません。首を長くできる人なんかいないと言います。それはキリンの話になってしまいます。ですから、具体的に目で見て、鮮やかに分かりそうな表現をされたり、分かりにくいときには絵で描いて示してあげたりすると、とてもいいわけです。

## 2-2. 中枢性統合が弱い

そういう背景にあるのが、脳の働きを組み合わせる発揮するのが弱いということです。

例えば、運動が一番分かりやすいのです。トランポリンが好きな子はよくいるでしょう。保育所、幼稚園でもトランポリンがあると割びょんびょん飛んで楽しむ子がいると思います。びょんびょん飛び跳ねることが上手で、20分でも30分でも飛んでいる。ところが、その子に綱を持たせて縄跳びを教えてあげる。あとは、びょんびょん飛ぶタイミングに合わせて綱を回すだけです。これをやってみると、それが彼らにとってどんなに大変なことかが分かります。上肢も下肢も手も足も自由に動く子です。運動麻痺がないのです。しかし、足と手を同時に動かせないのです。日常生活のほぼすべての局面で、同時相互機能が弱く、中枢性統合が弱いのです。だから、自分の気持ちと相手の気持ちを同時に考えることができないわけです。

ですから、この子たちは複数の情報を発信しませんし、相手の方からもそれを読み取れません。私たちが言葉を使い、表情を使い、身振りを使い、このようなことを説明しても、見えるものにだけ関心を向けているかもしれません。狭い所に深い関心が向かっていくというのが発達障がいの子どもの特徴です。あっちとこっちといろいろなものを同時に、複合的に組み合わせる能力を発揮することができないのです。ですから、一般に狭い所に強い関心がいきますので、いろいろな場面で、木を見るけれども森を見ないというような行動がとて

も多いのです。

彼らに、すべり台があり、ブランコがあり、友達がボール蹴りをして遊んでいるというようにいろいろな場面が一枚の絵に収まっている公園を描いて見せます。一般の子どもに「これは何の絵？」と聞けば全体を見て答えますから、「公園でみんなが遊んでいる絵」という言い方をすると思います。ところが、発達障がいの子にそういう絵を見せると、一番強い関心がある所へぱっと目がいきますから、犬が1匹端の方に描いてあれば「犬の絵」と言ったり、「ブランコの絵」などと言います。いろいろなものを見て、総合的に、この1枚の絵は何を意味しているかというとなえ方ができないのです。

想像力が必要ですから。場の空気を読むのも難しいです。相手が自分と違うことを考えているなどということは、大きくなるまで、あるいは大人になるまで分からないという人も珍しくありません。彼らも自由に話ができて、高い能力をだんだん身に付けていきますと、人は自分と違うことを感じたり考えたりすることが分かったということを言います。一般の子どもなら3歳児でも分かります。お母さんは私と違うことを考えている、感じている。○○ちゃんは自分と違うことを思っているということは普通の子なら十分分かるわけですが、彼らは分かりません。想像力が弱いのです。友達が自分と違うことを感じている、考えているなどということは、思いもよらなかったりします。

ニキリンコさんという非常に能力の高い自閉症の人がいます。ご存じの方が多いと思います。外国語の文章を日本語に翻訳する翻訳家の方です。何冊もの本を翻訳しています。そのニキリンコさんが、「私は大きくなるまで、自分に背中があるなどということが分かりませんでした」とおっしゃっています。見えないから分からないのです。見えるものはよく分かるのですが、見えないものが分かりにくいということをおっしゃっています。

また、複数の情報を処理するのが大変難しいのです。岐阜県でニキリンコさんと講演会をご一緒したときに、ニキさんは面白いことをおっしゃいました。「私の頭は先着ご一名しか入れません」。映像による情報が入ってきやすいので、目で見るのが得意だという意味です。ですから、映像を見ているときには他のものは入りませんから、見ているものについて誰かが説明してくれても、その説明は聞こえません。見ているもの（先着ご一名様）を頭から追い出して、「さあ次のお客さま、どうぞ」と言って話を聞くことができるのですということです。非常に具体的ですよ。そんなことをおっしゃっていて、「ああ、そうかな」

と思いました。一度に二つ以上のことを言われると、最初に言われた方が頭に残る人、後から言われた方が頭に残る人、両方とも分からなくなる人がいます。子どものときには特に多いです。

また、場の空気が読めなくて想像力が弱いのです。そして、重要な情報と重要でない情報とを同時に考えることができませんから、優先順位を付けられません。ですから、「どうしてそんなことをやっているの」ということをやったりします。「こっちのことがもっと大切でしょう」と思うようなことをやらないで、われわれから見るとつまらないことに夢中になっていると思えることは決して珍しくありません。一般の子どもたちは、幾つものことを同時に見比べて、その中で大切なことをします。大人になるとさらにそうですが、そういうことがなかなかできないわけです。

さらに、一度に複数のことを考えられないということも少しお話ししました。高校生や大学生になりますと、これも非常に多くの人が言うことですが、講義を聞きながらノートを取ることが非常に困難になります。二つのことを同時にすることが大変困難なのです。特に話し言葉の講義を聞くこと自体が、見えない情報ですから、かなり大変なのです。

しかし、入学試験は、先生の講義で勉強しなくても、参考書で勉強して文字で解決できるわけです。3年近く前に東京大学が発達障害支援室をつくりました。入学試験で合格してくるわけです。目で見て分かるように問題があるわけです。答えは文字で答えるわけです。これは視覚的な世界です。今どこの大学でも発達障がいのある学生がいない大学はありません。近年、いろいろな事情があるでしょうが、入試に自由討論を入れようという動きが幾つもの大学で始めているそうです。今までは筆記試験だけでした。筆記試験だけですから、高機能の発達障がいのある学生で受かる人がよくいるわけです。発達障がいのある人を単純に排除するだけが目的なら好ましいことではないと思うのですが、彼らは自由討論がとてとても苦手です。数人で、あるテーマを与えられて、試験官がいて、そこで自由に意見を交換してください、討論してくださいというと、発達障がいのある学生は絶対外れてしまいます。不可能です。話し言葉を聞くということが、まず下手です。それを心に留めながら、いろいろな人がいろいろなことを言っていることに対して自分はどのような意見を言うか。こんな同時総合機能というのは自閉症の人には徹底的に不利です。悪く言えば、自閉症の人を振り落とすための試験かなと私は思ったりします。筆記試験以外に自由討論の試験が

あってはいけないとは思いませんが、発達障がいの人を振るい落とす意味だけなら、これは差別だなと思っています。彼らが自由討論に入るということは、まず不可能です。

### 2-3. 注意集中の問題

彼らの注意は、狭い所に強く深く向かいます。ですから、発達障がいの中には一芸に秀でている人が時々出るわけです。私も一芸に秀でている大変優れた芸術家を何人か存じ上げています。あるいは陶芸の世界で高い能力を発揮している人もいれば、手芸の世界、絵画の世界でもそういう人がいます。それから特定の領域での専門家、物理のある領域、化学の限られた狭い領域の事柄で大変高い能力を発揮する人は珍しくありません。

図書館で働いている人で、書籍の整理をどうして完べきにきちんと素早くできるのか。そして、それをきちんと覚えているのか、驚くような人は私は何人か知っています。彼らは図書館の仕事に向いているとある本に書きましたら、ある地方の図書館の司書の方からその本を出した出版社にクレームが来たと聞きました。日本の図書館では職員が誰でも分担して接客の仕事をしなければならないから、安易にあんなことを書かれては困るのだと抗議されました。私はそれを聞いたときに驚きました。接客の仕事は、それができる人がやればいいではないですか。書籍の整理は、コンピュータを使って、非常に高い能力を発揮する人がいるのです。ですから、それぞれの得意な持ち分をより良くやるようにすることがどうしてできないのか。接客の仕事は簡単に上手にできる方がたくさんいるでしょう。その人たちがやったらどうだろうと私は思います。

私がそのようにお返事したいからと編集部に言いましたら、取りあえず編集部に頂いた手紙だから、「著者はこう言っています」と編集部からお返事しておきますということでした。それでもまた繰り返しクレームの手紙が来たら、その次は本当に返事を差し上げたいと申し上げのですが、もう来ませんでした。しかし、何て心が狭いのだろうと思います。

発達障がいの方は、一般的にも就職の門が狭いわけです。それを一部こういうことが苦手だからといって排除しようとするのです。日本的だなとは思いました。ああいう図書館に就職しない方がいいと思います。そうでない人にも意地悪でないかなと思います。親切な配慮をしようという気持ちが本当にありません。得意なこと、苦手なことはいろいろな人にそれぞれあるでしょうから、

適材適所で働いてもらえればいいと思います。

## 2-4. 共同注視の問題

また、発達障がいの方は、その特性で同時総合的な機能が下手ですから、共同注視ができないという問題があります。興味や関心、話題を他者と共有できないのです。小さな子どもでも、抱っこしたり、手をつないで歩いているときに、目の前を珍しい犬が横切っていたり、すぐ目の上を珍しい鳥が飛んでいったりすると、言葉がよく話せないときでも子どもは声を出して指差してこちらに教えてくれます。これは「一緒に見ようよ」ということで、共同注視と言います。自閉症、発達障がいの子どもは、それをまずしないのです。珍しいとか面白いと思えるものを自分ではじっと見ていますが、一緒に見ようという感情を他者と分かち合いません。興味、関心、話題を他者と共有しないのです。われわれから見るとマイペースに見えます。ですから、会話や会議が困難です。

大変能力の高い自閉症の方でも、日常のマンツーマンの会話なら何も不自由はなくてお勤めになっているのですが、会議がつらいとおっしゃっています。会議に出るようによく言われるのです。仕事がよくできるようになってきたのでしょう。会議というのは不特定多数の人がそれぞれの意見をそれぞれの立場から言うので、あちらからもこちらからも意見が出てきます。それをまとめて追跡して、理解して、整理することを、そんな難しく考えなくても私たちはしているわけです。Aさんがこう言った、Bさんがそれに対してこう言った、Cさんはまた別の意見を言ったと、ずっと聞いていれば頭の中で自然に整理されていきます。それらの意見の中で自分はどれに対して一番賛成か、どれには反対かというように自然に心の中で整理できます。そして、自分の意見を言いたくなければ言うし、このぐらいのことなら言わないでおこうというのは言いません。いろいろな人が次々に言う意見を聞いて自然に整理して、大切なことをメモしておくことも同時総合機能なのです。

彼らはこういうことがとても苦手です。自分が話そうとすることと相手が考えていることを同時に考えるのは非常に下手です。誰さんがどう言って、彼さんがこう言って、それに対して、自分はこう思って、どう思ってというのが、会議に参加したときのわれわれの態度です。しかし、しばしば突拍子もないことを急に言って、「あの会議で、何であんなことを言ったのだろう」と思われてしまう人が時々います。悪意ではないのです。大変なのです。いろいろな人

がいろいろなことを言っている。その話には一応の筋道があるか、はっきりした筋道があるのです。その筋道に乗って、みんながあだこうだと言っているという読み取り方ができなくて、それぞれの人がそれぞれ勝手にものを言っているように思ってしまうのです。

それで、自分も勝手なことを言ってみようかという調子で発言して、みんなを唾然とさせるということがあるのです。どうして、あんなときにあんなことを言ったのだらうということが、能力の高い人の職場でよくあります。われわれや皆さんにしてみれば、みんながいろいろなことを言っているようでいて、それぞれ統制が取れているわけです。そのときの会議の主題に合わせていろいろな考えを言っているのです。彼らは、こういうまとまりを持っていろいろな人の意見を聞くことができないのです。ですから、決して悪意はないのですが、一方的に自分勝手というように思われてしまうのです。自閉症の子どもでもそういうことがあるのです。話をしても自分勝手な行動をしているとか、勝手なことばかりしているように見えるというのは、この人たちにしてみると仕方がないのです。

## 2-5. 時間の管理が苦手

また、時間の管理が下手です。発達障がいの子どもは、時間という概念が大変らしいです。今日は、保育所や幼稚園の先生が多いと伺いました。幼稚園、保育所時代で時間の概念をきちんと持てることはほとんどないと思います。川の流れは水の流れが見えますからいいのです。時間の流れというのは難しいです。第1に、時間という概念がとても難しい。

このたび朝日新聞厚生文化事業団から、大変能力の高い13人の自閉症の当事者に協力していただいていろいろな発言をしていただいたのです。大人になった人は本人が発言しています。子どもの場合は本人も発言しますが、お母さんが発言してくださるということで、13組の当事者の意見を実際にまとめてDVDを作りました。とても多くの人に喜ばれて見ていただいています。関心のある人は朝日新聞厚生文化事業団にお問い合わせをしてみてください。13人の自閉症当事者の記録です。

大人になって一人で生活していて、完全に充実して、お勤めもなさっているし、自炊をして生活をしている、大変能力の高い人です。われわれから見れば何の苦勞もないように見えますが、時間が分からないとおっしゃいます。そし

て、私はお料理が全くできませんから間違っただけを言うかもしれませんが、レシピ、献立の書いた本に従って作られるのです。まず、材料をこれとこれと合わせて書いてある。それを八百屋さんへ行って、そのままきちんと買ってこられるのです。そして、どのようにして何をしてということによってやっていくのですが、一番大変なのは火にかけて3分とか5分とかあるでしょう。これを自分で、このぐらいで3分だ、5分だということだとやると全部間違えるのです。ですから、どんなに短くてもタイマーを必ずセットします。幾つかタイマーを持っています。沸騰して3分とか5分とかいうのも、自分がどんなにそれをできないか。時間の概念は見えない概念ですから難しいのです。時間どおりに作業するのは非常に駄目です。急ぐことも苦手です。それから、手を抜くことも苦手です。臨機応変ということは本当に苦手です。きちんとしかできないというのも、この人たちの特徴です。

時間の流れの意味が見えないのです。この子たちは、水の流れなら、目で見るができるから分かるのです。私たちはそれと関連付けて時間の流れという言葉を使います。この先何が起こるのか、起きないのか、こういうことを考えるのは非常に困難で不可能で、疲れてしまいます。

予期しないことが起きることはこの人たちをととても苦しめます。ですから、保育でも教育でも、職場でも、時間が分かるようにスケジュールをしっかり教育してあげてください。絵カードを並べるとか、物を並べるとかして、今日はこういう順番で、今日はこういう取り組みと課題がありますよというふうにします。いい仕事をされる大人の人で、職場で働いている場合でも、今日は朝から何時までがこの仕事です。お昼休みがあって、その後またこの仕事で何時で終わる。こういう単純な場合はいいのですが、その間に幾つか別の仕事を差し挟む場合には明確に写真や文字で示してあげないといけません。何時までというときに、時計の針の位置を示しながら、時計の針がこうなるまでこの仕事をしてくださいということを明確に示してあげるといふ気遣いをして、とてもいい仕事をするのを援助している職場もあります。能力の高い大人の人でさえそうです。

いつも出勤するときに乗る電車が決まっている。あるとき事故か何かがあって、その電車が予定どおり来なかった。予定どおり来なかったら、その周辺に次に来ている別の電車に乗れば何でもないと、誰でもそう思います。そんな臨機応変の対応ができないので、とても遅刻してしまったという人もいます。予

期せぬことが起きることは、この子たちはとても苦手です。急に起きることもそうです。

一般に、保育所でも幼稚園でも学校でもそうですが、この子たちは行事が苦手です。行事のときには不安定でしょう。一般の子どもたちは行事は楽しいのです。一般の子どもたちのために、運動会にしろ、いろいろな発表会にしろ、行事をなさいます。自閉症の子ども、発達障がいの子どものには、よほど上手にゆっくり目で見えて分かるような指導の仕方を入れながら教えてくださいと、大抵苦痛、不安を感じています。行事は嫌な子どもが多いです。行事の意味が分かっていないとますます難しくなります。形を覚えて、何とかみんなと一緒にそれらしいことができればという介護がよろしいかと思えます。

純粋に子どものことだけを考えると、「行事は参加しなくていいですよ」としてあげる方が本当はいいのです。しかし、子どものお母さんが悲しむでしょう。わが子がみんなと一緒に運動会をした、わが子が発表会をほかの子と一緒にやった。親としては、それがどんなに励みになり、喜びになるか。そういう行事には、一般の子どもの場合でも保護者は喜びます。発達障がいの子どもの場合には、「○○ちゃんは参加しなくてもいいですよ」というのが本当は親切なのですが、保護者にとっては悲しいことです。ですから、できるだけ不安や困難、苦痛を感じることがないように、プログラムの全部でなくてもよろしいですが、参加されるようにしてくださるといいと思えます。意味で覚えるより形で覚えるということがあります。

また、いろいろなことを教えるときに、いつもスケジュールを提示しながら教えてくださいといいのですが、終わりの概念というのがないのです。私たちが終わりの概念をどのようにして身に付けてきたのか。昔は私も高校時代に数学の世界で『ゼロの発見』という本を読んだのです。ゼロという概念を数学者が発見するわけです。僕たちは今、ゼロの概念があります。プラスの概念とマイナスの概念の中間で、その基準になるゼロの概念です。昔、マイナスの概念なんてなかった時代があったということを読んだことがあります。終わるといふ概念は発達障がいの子どものにはないのです。終わるといふ概念も、やはり教えることはできませんから、次の別のことの始まりということで前のことが終わるといようにしていただいてもいいのです。「さあ、これを次に始めましょう」というので、別のことが始まることによって前のことは終わりというようにすればいいのです。終わりの概念は難しいということを知っておいてあ



てください。

## 2-6. 感覚の偏り

発達障がいの子どもを見ていると、みんなと感覚、ものの感じ方が違うというのをお分かりになると思います。あらゆる感覚に個人差を持ちながら、一般平均的な普通の子どもとは、光の感じ方にしろ、ものの感じ方が違います。光に対して、とても過敏な子がいます。大きくなってくると自分でサングラスをしますが、子どもときにはサングラスという概念がありませんし、保護者もわが子にそういうことをとは考えられませんから、強い光の中で一般の子どもよりはるかに苦しんでいることがあるということを知ってあげてください。

また、音に関しても、ほかの子と感じ方が違うことがあることを知っておってください。どうしてこの子はこんなときに不安定になるのか、奇声を発して嫌がるのだろうかというときに、隣の建築現場から変な音が聞こえていることが時にはあります。

運動会のピストルの音なんかはどうですか。何でもない子もいるのです。しかし、すごく恐れを感じる子がいます。そうしたら、笛の音に替えてあげてくださるといいのです。30年ぐらい前、外国の影響で、いろいろな学校でピストルをやって、ピストルの音にひどく不安を感じる子どもがいたので、何人も自閉症の子どもを集めて緊急実験をした人がいます。ピストルの音を何度も聞かせると、慣れてしまって平気になるのか、そうはいかないものか、ヨーロッパで実験研究した人がいるのです。いろいろなことをやる人がいるなと思ってその研究論文を読んだことがあります。大半は、音に対してますます不安を感じるようになって、慣れるという方向には行かないことが分かりました。ですから皆さんも、何度も聞かせれば慣れて平気になるだろうということをなさらないようにお願いします。以前以上に恐怖、不安が大きくなってしまいます。

ところが10人に1人、10%弱、だんだん音に慣れて平気になっていく子どももいるそうです。それでも90%はますます音に過敏で不安になってしまう人が多いわけですから、そういう無茶なことはしないでください。また、運動会のピストルを笛にすると、笛の音でもいろいろな音があって、音に対して特有な過敏さを示す子どもの中には、あの笛は合わないとか、この笛はどうだということがあったら、そういう配慮もしてあげてほしいのです。生まれつき違うのです。

味覚もそうです。味覚は一般の子どもとは本当に違います。この違いは、持って生まれた知覚、感覚の違いです。大きくなるにつれてだんだん慣れていくということはあるのですが、味覚の異常、過敏さは、無理やりに訓練して偏食をなくすということをした方がひどくなります。できるだけこの子たちに合わせてあげるのが良くなっていくのであって、こちらが訓練によって直してやろうという発想でやる方がひどくなってしまいます。偏食の訓練をして、食事全部が嫌になってしまうという子もいます。好きなものも食べなくなってしまうということがありますから、決してそうしないであげてください。われわれは何でも食べられるようになれば幸せだろう、健康にもいいだろうと思います。ですから、できれば何でも食べる子にしてやりたいと思いながら、いろいろ工夫して、これもあれも食べなさいとやります。何年もかかりますが、食べられるものだけを食べて、食べられないものは食べなくていいですよとしてあげた方がいいです。保育所時代、幼稚園時代にいろいろな問題が改善されるかどうかは別ですが、いい意味で本人任せにしてあげた方が偏食は早く良くなっていきます。

そして、こんな研究もあります。非常に極端な偏食であっても、その偏食によって健康を害することがあったという症例は世界でも何十年の間に2例くらいで、ほとんどないそうです。ですから、食事を楽しませてあげるという発想の方がいいようです。無理やりに嫌いなものを少しでも食べられるようにしてやるのは、こちらの善意、愛情ですが、なさらない方がいいのです。一般的に、「嫌いなものは食べなくていいですよ」と言った方がいいのです。少しでも食べさせてあげたいと思ったら、どのような調理やどんな味付けにしたら食べられるかという、こちらで工夫してくださる方がいいのです。

偏食があるからといって、ほぼすべての子が健康を害していないでしょう。インフルエンザが流行して園が閉鎖になっても、その子はインフルエンザにかかっていないということが意外に多いのです。発達障がいの子は感染症に対して抵抗力が割合強いのです。すごい偏食があるのに強いのです。何でも食べるけれども割合病気がちというよりはるかにいいです。あれこれ食べないけれども丈夫だという傾向が発達障がいの子どもにはあります。無理強いしないでください。努力をされるのでしたら、何をどのように調理するとこの子は食べるものが増えるかという工夫、努力をして、本人が何とか食べられるようにプッシュするやり方は避けてください。食事が楽しくないという状況になってしまう

ととてもかわいそうです。長く食事に対して良いイメージが持てなくなり、一番重要なのは、食事は楽しい時間にしていただくことです。これは発達障がいの子でもなくても食事は楽しい時間にする方がいいのです。私も忙しくなって、あれこれ大変になり、唯一の楽しみが食事の時間だということになることが時にはあります。食事は人生の喜び楽しみの大事な時間です。栄養の方を優先してしまって楽しみを失わずようなことを、特に発達障がいの子どもにはしないでください。なかなかその傷が消えません。

そして、もし感覚についてつらい思いをする子がいたら、そのことを外してあげる努力をしてあげていただきたいのです。電子レンジ、キッチンタイマー、赤ちゃんの泣き声、雷、蛍光灯の音、いろいろなものがあります。これはいつもそうではなく、その子の体調に従ってそうなることもあったりしますから、必ずいつもどういう光、どういう音に反応しているのかは分かりません。分かりやすいのは味覚と触覚です。感覚が私たちと違って知っていることを知ってあげてください。短時間で直りません。われわれと同じような感覚や知覚になれません。大きくなるまでにゆっくりとだんだんそうなっていきますが、無理強いて早く治そうとした方がどうも予後は悪いようです。できるだけ普通な感覚、知覚を避けて通っていくことができるように、保育や教育をしてあげてください。

こういうことも皆さん、お感じになったことがありますか。冷たさ、寒さ、痛みに対しては割合強いでしょう。別の言い方をすれば鈍感です。割合痛がらないです。普通の子なら大泣きして耐え難いほど痛かったらと思うようなことになっても、割合けろっとしています。ところが、くすぐったい感覚には非常に弱いです。ちょっとくすぐってやったださると分かりますが、ひどく過敏です。どうぞ皆さん、それぞれの子どもに、この子はどういう感覚、知覚に過敏で、嫌がるか嫌がらないかということを知って、嫌がる感覚からは外してあげてください。

それから、先ほどくすぐったがりの感覚が非常に過敏だと申しましたが、触覚が過敏なため新しい下着が着られない子がいます。そういうときには、よく分かっているお母さんは、裏返しに着せるとおっしゃっています。それから何回か洗うと平気になるとおっしゃっている人もいます。仕方がないでしょうね。過敏なのです。触覚が非常に過敏で、痛覚は鈍感です。それぞれに個人差があって、一般の子どもや人とは違うのです。

## 2-7. 心の理論 (Theory of Mind) の問題

また、相手が何を考えているか、どう感じているか、人の心を読むことが困難です。見えない世界に意味を持たせることが困難です。そういう状況ですから、社会性の問題や、相手が自分と異なることを感じていることが分からないわけです。ですから、決して悪意がなくて順番が守れないということがあります。ずるいとかわがままというのとは違って、公園などで遊具の順番が待てなくて割り込むことがあります。発達障がいの子どもには、割り込まれた方はどんなに不愉快な思いをするのかなどということを感じる力はないのです。そういうことが分かってくるようになれば大したものですが、そういう場面のときにどのように順番待ちをさせてあげるか、工夫をしてみてください。あるいは、そういう場面で無理に我慢させるようなことをしないということも大切かもしれません。順番なんて、とても難しいです。それがこの子たちの特異体質的なところですよ。

## 3. 養育、療育、教育、指導、支援

具体的に何かをするときには、可能な限り視覚的（物理的）に形を作って教えてあげることが要るわけです。アメリカノースカロライナ州のTEACCHプログラムを開発、発見した人たちが日本を訪問すると、「日本の社会では、視覚的（物理的）構造化がアメリカの社会よりはるかにきちんとできている。そういう意味では自閉症の人で大きくなった子が住みやすい社会かもしれませんね」とよく言われます。交通標識、列車の案内もそうですが、彼らが一番驚くのはレストランの入り口のウインドウに飾ってあるワックスモデルです。あれは驚きますね。実物そっくりのものが入り口のウインドウの中に飾ってあるわけです。ああいうものはアメリカにはありません。

アメリカのレストランにお入りになったことはありますか。何となく嫌ですよ。文字で書いてあるメニューが来るのです。日本は表のガラスのウインドウの中に本当に実物そっくりのワックスモデルができています。そして、中へ入るとメニューがあって、メニューに写真が張ってあります。至れり尽くせりです。ああいうのを見ると、アメリカノースカロライナ州のTEACCHプログラムの人たちも日本の視覚的構造化はすごいと言います。道案内にしろ、何にしろ、確かに日本は微に入り細に入りやります。鉄道などでもそうです。何々

線の方向を幾つもの外国語で書いてあります。確かにそう言われてみると、私もそんなにたくさん経験があるわけではありませんが、ヨーロッパでもアメリカでも1回や2回の経験があるわけです。不親切です。よくみんな間違えないで乗っているなどと思うほど表示がわずかです。飛行場が一番いいのです。鉄道などは本当にはないです。

日本の場合は本当に親切です。何番線にどこ行きの電車が何時に出発すると、本当によく書かれています。これを視覚的（物理的）構造化と言いますが、日常生活の中の保育や教育の場に、そういう工夫をどのようにして取り入れるかということです。われわれも、そういう意味では視覚的（物理的）構造化の恩恵にはあずかっています。

私も今年で77歳になります。65歳を過ぎるころから家内の提案で、1年に1回外国旅行をするのです。1年だけ病気で行けなかった年がありますが、1年に何回もというほどせいたくはできませんが、1年に1回外国旅行をします。しかし、自分たちで外国旅行をあれこれ計画する能力はありませんので、旅行会社に頼んで10人とか十何人のパックの旅行に入れてもらって行くのです。インストラクターの方がいて、その後を付いていけばいいわけです。大抵1週間とか10日の旅の中に半日ずつ2回ぐらい自由時間があるのです。ウィーンの街で自由時間とかローマの街で自由時間があるのです。皆さん、ご経験がありますか。少しも自由ではないでしょう。発達障がいの子どもの持つ学校の先生たちはよく分かっているのですが、子どもたちは休み時間に一番混乱します。何をしたいか分からなくなります。同じように、われわれもローマの街、ウィーンの街を下手に歩いたら迷子になるだけだという不安があります。

われわれをガイドしてくださっている人はそれをよく分かっている、「休み時間には私はあそこへ行って、こんな食事をして、どこの公園へ行こうと思う」「どこのショッピングセンターへ行ってみようと思う」とかいろいろなことをおっしゃるのです。「よろしかったら、どうぞ。ご一緒してくださっていいですよ」とおっしゃるのです。ほとんどの人は付いていきます。これが構造化だと思いますが、本当にそうです。よほど旅慣れているとか、その街へ何度も行っている人の場合はそうではありません。イタリアへ行ったときに、そのような時間に「私は自由行動をさせていただきます」とおっしゃった人がいますが、聞いてみたら今日が3回目だとおっしゃっていました。そういう人になればそうですが、初めての人は、言葉、地理、文字などいろいろなことに不安

になりますから困るわけです。ですから、われわれは、この人たちに保育、教育指導・支援するとき、できるだけ目で見えるようにしてあげなければいけません。

自閉症、発達障がいの子どもたちは、自分の国、自分の社会にいながら、われわれが外国にいるような不安を感じるとよく言われます。確かにそうです。休み時間の方が不安定です。授業中や保育課題があってあれこれやっているときの方が分かるように指導しているのでずっと安定します。私たちが添乗員に連れられて案内されて、あれがどうで、これがこうでと言ってもらっているときは安定しているわけです。自由時間と言われた途端に不安定になります。

発達障がいの子どもが学校へ行くようになると、もっとよく分かります。休み時間の方が不安定になります。ですから、ノースカロライナ州のTEACCHでは、休み時間の過ごし方から教えてあげます。小学校の低学年のときは、先生は休み時間の過ごし方を本当にこまめに教えています。保護者と相談しながら、「この子は、おうちにいるときに何をして楽しんでいますか」「何をしているときに楽しそうですか」ということを聞きます。もし、こういう玩具で遊んで楽しそうにしているということであれば、「それを学校へ持たせてあげてください」と言っている先生もいます。それを先生が預かっていて、休み時間になるとそれを出してあげます。そして、「休み時間を楽しみなさい」と言っています。休み時間に不安定になるというのは、私たちが海外旅行で自由時間に不安定になるのとよく似ています。同じかもしれません。

#### 4. 当事者に学ぶ

「言葉よりも絵で考えるように生れついた」というのは、テンプル・グランディンという人の言葉です。今はコロラド大学の教授で、自閉症の人です。十数年前に、先生がまだ助教授のときに東京と大阪で一緒に講演会をしたのですが、そのときに「私は、言葉よりも絵で考えるように生まれついたのです。絵と文字を組み合わせて考えることもあります」とおっしゃっていました。

「自分にも背中があることは大きくなるまで分からなかった」と言われたニキリンコさんと、藤家寛子さんという、やはり同じようなアスペルガーの方が対談をしている本があります。『自閉っ子、こういう風にできてます』という本です。「こたつに入ると、足が見えなくなるから何ともいえない心配、不安

になります。一番困るのはこたつから出るときです。見えない足をどのように動かしていいかわからないから、うまく出られない。それでこたつの足を大きくめぐりあげて、足をめぐりながらこたつから出るので。その都度、家族にせっかく暖まった空気をあんたは どうして出すんだと怒られた」。こういうことを藤家寛子さんとニキリンコさんは対談で生き生きと語っています。「炬燵に入ると足がどこにいつちゃったのか分からないから不安です。だけど暖かいのは気持ちがいいです」。何とも言えない、われわれには分からない感情です。

「話し言葉の授業を聞き分けるよりも、教科書や参考書を読む方が得意です」。これは何年前かに京都大学に合格したという学生さんからもらった手紙です。それまでの生きづらさ、息苦しさをゼミナール担当の先生に訴えました。そうしたら、あるクリニックの先生を紹介してくれて、そこへ行って自分が初めて自閉症だということを診断されました。うれしかったそうです。今まで自分がいろいろ苦しんだのは、自分が怠けたから苦しかったのではない。生まれつきアスペルガー症候群、高機能広汎性発達障がいという障がいがあるから大変だったのだ、自分の努力が足りないから苦しかったのではないのだということが分かって、うれしかったのです。どうしてもっと早く教えてくれる人がいなかったのか。こういう思いで受験のところから書き始めてあるわけです。

「高校時代に、クラスの仲間たちは40分も45分もある授業を どうしてきちんと聞き続けていることができるのかが、不思議だったのです。自分は話し言葉を聞くことはどうしてもできない。先生は黒板に字を書きますが、多くは話し言葉です。それを聞き続けていることは自分には到底できなかったのです。しかも、クラスの人ほぼみんな、話を聞きながらノートを取っている。それが一切できない。いつも劣等感を感じて苦しんでやってきたのです。自分はそのために参考書、教科書を読んで勉強するしかなかったのです。それで大学に入って、クリニックで自分がアスペルガー、高機能自閉症と言われたので、自分のことをよりよく知りたと思って本屋さんへ本を探しに行くと、佐々木先生の本が真っ先に目に留まったので、それを買いました」と書いてありました。

この辺もシングルフォーカスです。普通の人なら、もう少し見渡して何冊かの本を手にとって見比べて買うのが普通です。「最初にぱっと目に付いた、だからそれを買いました。うちへ帰って急いで読みました」。視覚的なことは強いわけですから読むわけです。文字で勉強したことはとてもよくできるわけです。だから、学外の試験はよくできたわけです。全国共通学力テストのような

ものはいつも全学で1番だった。それでまた学校で「君はどうして学校の勉強をばかにするんだ」と叱られたそうです。「学内の試験はいつも中くらいの成績を取るのが精いっぱいでした。ところが外の試験になると、その学校で受けた人の中でダントツに自分がトップでした。全国の統計でも必ず上位10%ぐらいに入りました」。これは参考書を読んで勉強したからです。学校の先生にしてみれば訳が分からないでしょう。学外の試験になるとずば抜けてできて、学内の試験になると平均点ぐらいがやっとなです。それで「おまえは学校の勉強をばかにする」と言ってよく叱られたけれども、どうしても説明できない。それで苦しんできました。

「授業中、どうして君はノートを取らないのだ」と言われても取れないのです。それを言えないわけです。どう説明していいか分からない。苦しんで苦しんできたのです。そして教科書、参考書など本を読んで勉強した知識で京都大学へ合格するわけです。京大に入って、先生に今までの苦しさを訴えたところ、自分がアスペルガーだと分かる方向に導いてくださってうれしかった。「佐々木先生の本を買って読みました。そうしたら佐々木先生は、その本に私のことばかり書いていることがよく分かりました」。面白い見方でしょう。「そこに書かれていることに自分がよく当てはまりました」というのは普通の人の発想です。「この本の著者は私のことばかり書いている」。こういう発想は何とも言えません。われわれと微妙に違います。

こんなことを書きながら2～3の質問が書かれていました。京都大学に入って、こういう人だということ自分をよく分かって、先生も分かってくださっているから、これからはずっと学びやすくなるでしょう。わがままで、ずるくて怠けているわけではないです。

相手が自分と違うことを考えていることが分からない人がいます。先ほどのテンプル・グランディンさんですが、シェークスピアは読めます。視覚的な情報は強いですから本を読むのは非常に速いです。しかし、「シェークスピアを読めるが、ロミオとジュリエットの悲しみの意味が分からない」と言っています。それはシェークスピアを本当に読んだことにはなりません。

これは日本の人です。「トランプで神経衰弱が得意だったけれど、鬼ごっこを楽しむことはできなかった」。みんなが神経衰弱になりそうなほどゲームは大変強いのです。ところが、鬼ごっこのような誰だって簡単にできるようなゲームができないのです。



そして、幸福といった抽象的な言葉の意味が分からない。これは先ほどのテンプル・グランディンですが、ハッピーという言葉の意味が分からない。分からないでは済まされないので、自分は「フレンチトーストを食べているときのあの気持ち」とよく言うのだといいます。ハッピーという概念を置き換えて、このように具体化、個別化しないと駄目なのです。テンプル・グランディンさんはこういう努力をしています。私たちなら、そんな狭い概念の意味ではないでしょうと言えますが、どれだけの広がりがあるのかと言われても説明できません。大人になって能力の高い自閉症の人がこういうことでこんなふうに関わってきたということをわれわれに説明してくれているのです。

皆さんのところにいるのは、まだ幼い子どもです。大きくなってもこういうことで苦しんでいるというのは、どんなにいろいろなことの意味が分からないでずっと悩んでいるか、不安がっているか、苦しんでいるかを分かってあげてください。だから、目で見て分かるように物を見せたり、短い言葉で具体的に伝えてあげてくださいというのはそういう意味です。

関心が狭いところへ強く向かう。これは、オランダの有名な人の話ですが、「金槌、ハンマーを持って鉄の塊だけをまず見て、一時して、木の棒がそこに偶然横たわっているように見える。さらに一時したら、鉄の塊と木の棒は実はつながっているのだということが分かる」。このように時間をかけて順次理解をしていくのです。遅いでしょう。発達障がいの子どもの初めての体験はみんな遅いのです。よくできるようになってくると速いです。パターンが決まってしまったことはとても速いです。

もっとびっくりします。先ほどのテンプル・グランディンさんです。コロラド大学の教授です。これはこの人と私が十数年前にご一緒に講演会をしたときに聞いたのです。一枚の白い四角い紙をばっと提示されて、私たちなら見た瞬間に、これは白い1枚の四角い紙だという認識になります。先生はそうならないのです。おっしゃった順番で言いますと、「まず、表面がスムーズでなめらかなだなどいうのを見る」。私たちは、なめらかさだけを見るなどというのはできません。白というのが一緒に見えてしまいます。「少し視点を変えたらホワイトというのが分かる。その後さらに」、もう少し見渡すからでしょうか、「フラット（平板）だというのが分かる。さらにその後、薄っぺらなものだということが分かる。さらにその後、周りをずっと見渡すことによって、スクエア（四角い）ということが分かる。そこまで分かって1枚の白い四角いなめらかな、

薄っぺらな紙だという認識になるのです」とおっしゃっていました。

この人たちが生きていくのはすごく大変ですね。われわれなら見た瞬間に、平板、スムーズ、白い、薄っぺら、四角いとか全部読み取るのではないのでしょうか。これの一つずつ読み解いていきます。講義をしながらノートを取ることができない高校生、大学生は決して珍しくありません。

もっと驚いたのは、ドナ・ウィリアムズという英国の自閉症の人です。初めて本人が自分をカミングアウトして『NOBODY NOWHERE』という本をお書きになりました。日本語では『自閉症だったわたしへ』という題で翻訳されています。読まれた方はいますか。20年近く前でしょうか、その方と、やはり東京と大阪で講演したことがあります。驚きました。一度に二つのことはできないのです。これは分かります。しかし、彼女は自分で話をしながら、自分で話をしていることを聴き続けることをできないのです。これを言いながら講演しているのです。ちょっと信じられないでしょう。短い言葉のやり取りぐらいはきちんと聞くことはできますが、少し長くなってくると、自分で話していることをずっと聴き続けていることができなくなります。「自分はシングルトラップです、モノトラップです。一度に1本の配線しか動かない」とおっしゃるのです。考えられないでしょう。私は先ほどから皆さんに自分の話をしていますが、自分の言葉をずっと聴き続けています。自分の話したことと、聴き続けることを同時並行的にやっています。学生のころ、先生の講義を聴きながらノートを取ることを同時並行的にやっていました。こういうことができないのです。大変です。この子たちはそういう自覚ができない中にいるのです。

ニキリンコさんは、画像が頭に入っていると話や文字は入ってこなくなります。何かを見ているときに、何かを説明されても聞けないということです。二つのことが同時にできないことがどんなに大変かということです。

そして、「習慣やルーチン以外のことに苦しんでいる」「予定外のことが苦しい」。何が起こるかなどと考えていると、みんな苦しいのです。だからスケジュールをしっかりと示してほしい。これは、この子たちの持っている強い願いです。どのようにしたら、今日一日の保育日課になるのだろう。1日分示してあげるのがいいか、半日ずつ2回に分けて提示してあげるのがいいか。能力の高い子どもの方が長い提示ができます。能力の低い子どもは午前中いっぱい、午後いっぱいなど分けて提示し直してあげる方がいいということがあります。

それから、こういうことがよく言われます。「○○しなさい」は分かります

が、「〇〇してはいけない」というのは何をしてよいのか分からなくなるのです。例えば保育所の子どもで、園庭に出て水道の蛇口をひねって水遊びをずっとしている。「水を出しっぱなしにして遊んではいけませんよ」と言います。「もう水遊びをやめなさい」と否定的に言います。子どもたちは「分かった」と水道の蛇口を止めて、みんな一斉に散らばってそれぞれの方へ行きます。砂場へ行く子も、ブランコに行く子もいます。そこに発達障がいの子どもがいたとします。その場で大騒ぎするでしょう。かんしゃくを起こすでしょう。こだわりが強い、執着心が強いとわれわれは考えます。実際のところは、「水遊びをやめなさい」と言われたら、何をしてよいのか分からなくなるのだそうです。

しかし、子どものころにそういうことを説明できる子はいないわけです。みんなは「水遊びを終わりにしなさい」と言われたら、何ていうことはありません。砂場に行って遊ぼうか、ブランコに乗ろうかと考えます。発達障がいの子どもの場合には、何かをしてはいけません、あるいは、それはもうやめなさいということがあったら、すぐに、その子が大好きな遊びをしっかりと目で見て分かるように説明してあげてください。「水遊びをやめて、お部屋に入ってブロックで遊ぼう」「パズルで遊ぼうか」「〇〇ちゃん、大好きな恐竜の図鑑を見ようか」。何をしようかということの方をより強く言います。「〇〇をしてはいけません。もう終わらなさい」ということも言いますが、それ以上に、それを打ち消すくらいに鮮明に「〇〇をしよう」「〇〇をしなさい」、これをきちんと言ってあげてください。「〇〇しなさい」は分かるけれど、「〇〇してはいけない」が分からないので、この子たちはどうしていいか分からなくなるのです。一般の子どもたちは、「水遊び駄目なら砂場で遊ぼう」「ブランコに乗って遊ぼう」とすぐ次のことのイメージできるのです。自閉症の子はそこでぱたんと止まってしまふのです。

大人の高機能自閉症の人も集まっている勉強会でこんな話をしていました。そうしたら一人の青年が、「それはよく分かります。僕も明日から会社を辞めてくださいと言われたときにパニックになりました」と言うのです。本人は切実です。この社に来るのは終わりにしても、あっちの社の別の課に行って働いてくださいと言われたのならずっと気持ちが楽です。高機能の青年です。東京にある国立大学の大学院を卒業して就職をされたアスペルガーの方ですが、退職の危機にあるのです。人との調和やいろいろなことで苦しんでいるし、もう辞めなさいと言われたら混乱があります。同じことです。水遊びをやめて、お

部屋に入って大好きなパズル遊びをしようと言ってくださればいいのです。何かしてはいけないと言っぱなしでは駄目です。

それから、苦痛であった記憶を消すことができません。これはチャールズ・ハートというアメリカの自閉症協会の理事の方で、かつて日本にも講演においでになったことがあります。ハーバードの方で、自閉症の息子さんを持っています。自閉症の子どもと付き合っていて、全米の自閉症の人々の幸福を考えながら長い歳月を過ごしてきました。そして「今、自閉症の人の最も本質的な大きな特性の一つ何か思い出せと言われたら、物事を忘れることができないで苦しんでいる人という言い方をしたい」とおっしゃっていました。これは言われてみたらはっとします。自閉症の人が傷付けられたら、その記憶は消えないということなのです。何年前のことでも、まさに今そのことが起きているように苦しませたり、悲しませたりします。私は、過保護に子どもの言いなりにほいほいしてくださいと言っているのではないのです。けれども、この子たちをひどく傷付けたら、そのことが消えないのです。どれほど大変なことか。

一つ、こんなことをご案内したいと思います。私は、たくさんといっても10件足らずですが、経験してきました。

まず、30代の終わりのご婦人です。大阪のYMCAで講演してくれました。3人の先生それぞれが講演をして、その後、意見の交換会をシンポジウムのような形で話をする予定でした。前半にそれぞれが20分くらいずつ話をしました。その中に1人ある中学の校長先生がいました。素晴らしい先生でした。ある中学が大変に荒れていて、ひどい学校だったのです。「あの学校に赴任が決まったら教師が辞める」と公言している先生が何人もいるくらいひどい学校でした。そこへ校長として赴任したのです。すごい先生ですね。確かあのお話では、3年ぐらいかけて立派な中学としてよみがえらせたのです。商店街の人の協力が先にあり、保護者会の協力の方が遅かったとおっしゃったような気がします。いずれにしろ立派に立ち直らせたのです。いいお話でした。

いじめがひどかった学校らしいのですが、その話を聞いて私たちは感動しました。そして、それぞれ3人の話が終わったときに控室でお茶をいただいて、さあ、その後に意見交換会をしましょうかと休んでいるときに1人の女性が飛び込んでこられました。「先生、助けてください」と私の横でうずくまってしまったのです。不安症かと思いました。「私は中学生のときにどれだけひどくいじめられたか分かりません。それが今そのままよみがえってきたのです」と言わ

れるのです。フラッシュバックというのは、あのときはつらかったというように遠い話ではないのです。今もまさにその渦の中にいる体験です。私たちの中にはそういうことはありません。「あのころ、あのときはつらかったな」と思うことがあっても、あれは遠い昔の話だということでしょう。そうならないのです。

阪神淡路大震災の時でも、目の前で肉親を亡くされたり、非常につらい体験などは何年たってもフラッシュバックしていることがあるのだそうです。フラッシュバックは「あのときはつらかった」というものではないらしいです。まさにその渦の中にいる。私は、あのときに本当にそれを見せてもらいました。「先生、助けてください。中学生の時にひどいいじめにあって、あれがフラッシュバックしている。今、自分は中学生になってしまった」と言うのです。すごいです。全身から血の気が引くように冷や汗を垂らしてうずくまってわなわな震えているのです。驚きました。「どうしましょうか」と私は言いました。「ここは中学ではありません」、それだけを言い続けてくださいと言われてました。それで私は「ここは中学ではありません。ここは中学ではありません」とどれだけ言い続けたでしょう。「先生、少し楽になってきました」と言われて見たら、少し血の気が頬にぽっとさしてきたようになりました。それで、先ほどお話ししましたように、「ここは〇〇ではない」という言い方より「ここは〇〇です」という言い方がいい、否定的な言い方はあまり良くないというのがある、そこから言い方を少し変えたのです。「ここはYMCAです。ここはYMCAです」と、今度は肯定的な言い方を続けて、またしばらくすると「ああ、おかげさまで元気になりました」と立ち上がられました。フラッシュバックはすごいです。そのときの体験がそのままよみがえってきってしまう。

なぜこういうものを引き合いに出すかということ、この子たちはその体験が消えないのですから、日々の生活の中で苦しめないでくださいと言いたいからです。フラッシュバックするのです。ちょっとした似たようなきっかけがあると、そのままよみがえってくるのです。私たちにもよほど衝撃的なことでもあれば、フラッシュバックというものはあるでしょう。しかし、そんな衝撃的なことが私にはないからフラッシュバックの経験はありません。阪神淡路大震災の時でも、神戸の震災の時でも、フラッシュバックがまだ続いている人がいるという話を聞きます。目の前で肉親を亡くされた人がいます。燃えている中で「助けて、助けて」と声上がる。その残像を取り除くことはできない。だんだん声が遠

のいていって、目の前で肉親を亡くしたという人の話を聞くわけです。そのフラッシュバックはすごいでしょうね。たまらないでしょうね。

自閉症の子どもたちをそういうことになってしまうのです。つらかったことを捨てることができないのです。苦しめないであげてください。食べ物を無理強いしすぎないでください。できるだけ苦しめないで、悲しまないで、つらい思いをしないで学べるように、人と交わることができるようにしていただきたいということです。

そして大人になったときに、ほぼ必ず言うことは、「僕（私）のことを理解してほしい。理解できないなら支援はしないでください。苦しめられて傷つけられることの方が多いですから」。こういうことを勉強会で私に向かって何人かの人がおっしゃるのです。「こういうことを子どものころから今までいろいろな人に言ったことがありますか」と聞くと、ほとんどの人が今日が初めてだとおっしゃいます。本当にびっくりします。「どうして周りの人、家族の人や先生やいろいろな人に言わなかったのですか」「言えないのです」。われわれから見ると、非常に不安、臆病、控えめに見えます。「理解できないなら支援なんかしないでください。無理解で熱心な人が自分たちを一番苦しめるのです」という言い方をされます。理解してあげてください。そして、その人たちができないことはできないのですから、無理やりさせようなんてしないでください。皆さんたちが寄り添って保護しながら、心を掛けながらゆっくり教えてくださればと思います。早くいろいろなことが上手にできるように一生懸命になさらない方がいいように思います。

## 5. 終わりに

最後は専門家の言葉です。いい表現だなと思うからここにレビューしておきます。

これはローナ・ウィングさんの言葉です。「自閉症の人が私たちの世界(文化)に入ってくることは非常に困難(不可能)で、私たちが自閉症の人たちの世界(文化)に入っていく努力をする方がずっと易しい」。皆さん、いかがですか。皆さんは自閉症の子どもの世界や文化に入っていきますか。近づいていくことができますか。そうする方が、この子たちを私たちの世界や文化に導いてくるより、私たちの方から向こうへ入る方がずっと易しいのです。ずっと易しいといっ

てもすごく難しいです。自閉症の子どもの世界に入っていくこと、近づいていくことができるか。ローナ・ウィングさんの見事な表現です。「こちらから近づいていく、こちらから入っていく、そういう努力をした後で、あるいは、そういう努力をしながら私たちの世界や文化に導いてくる努力をするのがいい」ということです。

私たちは、多少無理があっても、つい私たちの世界へ引っ張ってこようと思います。そんなひどいことをしないでください。こっちが相手の世界へ入っていく努力が先です。そうしながら私たちの世界へ入ってきなさいよという気持ちです。ローナ・ウィングさんはこういう言い方をしていますが、もっと別の易しい表現をすれば、こちらが相手を十分理解した後で、こちらの言うことも分かって、こちらの言うことも理解するということです。言葉を代えて言えばそういうことだと私は思っています。

同じように、英国の心理学者でパトリシア・ハウリンさんという人がいます。3年ほど前に九州大学にしばらく滞在されたそうです。そのときの一般市民に向けての講演会の生の原稿をそのまま頂いたので、読んでみていいなと思ったところをほんの少し私が勝手に翻訳しました。自閉症の人は「自分の周囲の世界で起きていることの意味が分からない。自分が訴えたいことの伝え方がよく分からない。周囲の状況がどのように推移していくのか見通しを立てることができない。そういう困難な状況から逃げ出す術が分からない。こんな状況にもしあなたが追い込まれたら、あなたならどうしますか」。見事な講演でした。

自分の周りで起きていることの意味がよく分からないのです。例えば運動会の練習をしているときなど、自分で訴えたいことをどのように相手に伝えていいか分からない。この人は伝え方がうまくできないのです。こんなことを今私に言っているけれども、今まで誰かに聞いてもらったかという、誰にも言ったことがないのです。「どうしてですか」「どうせ分かってもらえない」ということを言っています。伝え方が分からないのです。

パトリシア・ハウリンさんの「こういう状況がどのように推移していくのか分からない。そういう困難から逃げ出す術がない。もし、あなたがこんな状況に置かれたら、あなたはどうしますか」というのを読みましたが、私もこんな経験をしたことがありません。周りで起きていることの意味が分からなくて、自分がそれに対して何をどう発言していいのかが分からなくて、この先どうしなければいけないか分からなくて、こんなことはたまらないと思う。ここから逃

げ出したいと思うけれども、逃げ出す術もない。こんな状況に置かれることはないですよ。自閉症の人は始終こういう状況に置かれるのです。これを聞いて私は疑似体験的にどういうことか、勝手にこんなことを思いました。

横田めぐみさんやほかにも北朝鮮に拉致された人がいますが、相当の時間こういう状態だったのではないのでしょうか。何が起きたのか、周りで起きていることの意味が分からない。相手に自分の話を聞いてもらおうと思っても、相手は聞く耳を持たない。伝え方が分からない。どうなってしまうのだろうという、その状況の推移の見通しを立てることができない。そういう困難な状態から逃げ出す術がない。こんなときあなたはどうしますか。あるとき拉致されて、向こうの国まで連れていかれた人たちは、こんな状態ではなかったかと想像しているのです。全くパニック以外の何物でもありません。

自閉症の子は、不適切な養育や教育、訓練をさせられるとパニックになりやすいと昔よく言いました。TEACCHではパニックは全く出たことはありません。この30年間に31回訪問していますが、どこへ行っても自閉症の子どもがかんしゃくを起こしてパニックになっている様子を一度も見たことはありません。自閉症の子どもに対してこのようなひどい状況をつくらないのです。自閉症の子どもがパニックを起こすのは決まっているというのは間違いです。大変な数の人がノースカロライナ州を訪問していると思います。半年とか1年とか1年以上とか滞在された人もかなりいます。その人たちの誰もが、自閉症の子どもたちが教育やいろいろなことでパニックになっているのを見たことはないと思います。

周囲で起きていることの意味を、分かりやすく伝えてくれる。伝えたいことを伝えやすくしてくれる。周囲の状況の変化や推移を教えてくれる。それがTEACCHです。周囲で起きていることの意味を視覚的に構造化しながら自閉症の子どもに分かりやすく伝えるのです。そして自由に話す力がなかったら、文字カードや絵カードを渡してくれて、そのカードを使った伝え方を教えてくれます。相手が言うこともこちらに分かるように伝えてくれます。こちらから相手に何かを訴えたいときには、訴えたいことをきちんとカードに用意しておいてくれて、そのカードを選んで、そのカードを相手に提示することで自分の思ったことを相手に伝えることができます。周囲の状況の変化や推移を伝えてくれる。それがTEACCHです。

これは英国のローナ・ウィングさんが言ったことです。「自閉症の人が私た



ちの世界や文化の中に入って来る道筋を示し、私たちが彼らの世界や文化の中に入って行く道筋や手だてを教えてくれたのが、TEACCHの構造化である」。構造化というのはそういうことを意味しているわけです。私たちと相手の人との意味のあるコミュニケーションを可能にする方向です。通訳になる、そんなことを言う人がいます。お互いに相手を理解できないから混乱しているのではないということです。TEACCHの視覚的（物理的）構造化ということはそういうことのためにあるということをご理解いただきたいと思います。